



脳腫瘍について

総合病院 土浦協同病院

脳神経外科 医師 伊藤 慧

司会者：今日のテーマは脳腫瘍です。脳の病気というと怖い病気ばかりですよ。脳梗塞やくも膜下出血で亡くなった、後遺症が残ったという話を良く聞きます。

伊藤：確かに、くも膜下出血は半数の方が寝たきりになるか亡くなりますし、脳梗塞では手足が動かない、言葉がしゃべれない、理解できない、認知症、うつ症状など様々な症状が後遺症となることがあります。でも、元通りの生活に戻られる患者さんも大勢いらっしゃいますよ。

司会者：色々な症状が出るのですね。

伊藤：どうして色々な症状が出るのかというと、脳の中の場所によって役割分担があるからです。例えば脳幹という部分は、生命維持装置なので死に直結します。脳の前の方は理性をつかさどるのでやる気がなくなったり、すぐ怒り出したり、わがままになったりします。そのすぐ後ろは運動の命令をすところなので手足が麻痺します。左の側頭部のあたりには言葉の中核があるので、言葉が理解できなくなります。右の頭のとっぺんあたりは自分の場所を認識する地図があるので、家の中でも迷子になります。

司会者：とても複雑ですね。

伊藤：確かに複雑なので医者や看護師の中にも、脳の病気は苦手だという人はたくさんいます。でも、脳の中のどこに病気ができるかによって、症状が全然ちがうということは覚えておいてください。

司会者：では、あらためて脳腫瘍とはどのような病気でしょうか？

伊藤：生き物の体は遺伝子という精密な設計図で作られます。でき上がった体は、必要な分だけ古くなった細胞を壊し、細胞分裂で新しい細胞を補う新陳代謝を行っています。でも、この設計図の一部が壊れた細胞は、必要もないのにどんどん分裂をして増えてしまいます。その代表が皆さんの良く知っているがんやポリープです。がんは悪性、ポリープ

は良性ですが、これらをまとめて腫瘍といいます。この腫瘍が頭の中にできたものが「脳腫瘍」です。

司会者：そうすると、脳にできる腫瘍ということですか？

伊 藤：厳密にいうと違います。少し難しい話になってしまいますが、頭の中には神経をサポートする細胞や血管、脳を包む膜、ホルモンの司令塔である下垂体など、様々な組織があります。それらすべてを含めて頭の中にできた腫瘍が脳腫瘍です。

司会者：なるほど、脳は場所によって色々な役割があるだけではなく、神経以外の色々な細胞からできていて、その様々な細胞からできた腫瘍が脳腫瘍なんですね。

伊 藤：そうなんです。もう一つ、付け加えておくと、脳腫瘍の場合、「癌」や「ポリープ」といった言葉は使わず、悪さの程度を英語の grade という言葉を使って表します。一番良性のものを grade 1、一番悪性のものが grade 4 です。先ほど述べたように、頭の中には様々な種類の細胞があつて、grade も含めて細かく分けると 100 種類以上の脳腫瘍があります。でも、ほとんどの腫瘍は手術でとってしまえば治る良性のものなんですよ。

司会者：脳腫瘍でも完治するんですね！

伊 藤：大部分はそうです。でも、腫瘍自体が良性でも、できた場所によっては大きな症状が出てしまい、時には後遺症でしまいます。単純にはいかない困ったところなんです。

司会者：良性でも後遺症が出てしまう・・・。悪性だとどうなりますか？

伊 藤：悪性の場合は症状の進行が早く、余命半年という時代もありました。でも大丈夫。最近では早期に発見して、きれいに手術で取れば、その後の化学療法や放射線療法で何年も元気に過ごせる患者さんが増えてきています。

司会者：がんと同じように早期発見、早期治療が大事なんですね！ ではどのような症状に気を付ければよいのでしょうか？

伊 藤：片側の手足がうまく動かない、言葉がうまく使えない、顔の片側がゆがんでいる、食べ物がうまく呑み込めない、うまく歩けない、目の見え方がおかしい、などです。

司会者：脳卒中の症状と似ていますね。

伊 藤：脳の病気は、どの病気か、ではなく、どこに病気ができたか、によって症状が決まります。なので、脳卒中やアルツハイマー病など、他の脳の病気と同じ症状が多いです。脳腫瘍の場合、数週間から数年かけて徐々に症状が悪化していきます。進行がゆっくりだと歳のせいかな、認知症かな、と思い込んで、発見が遅れることがあります。おかしいな、と思ったら早めに医療機関へご相談ください。

司会者：なんだか私も不安になってきました。

伊 藤：症状が出る前に、交通事故の検査などで偶然見つかる方もいます。症状のない方は外来で検査できませんので、心配だから検査をしたいという方は、ぜひ脳ドックを受けてみてください。

司会者：脳腫瘍にはどのような治療がありますか？

伊 藤：脳腫瘍には100以上の種類があり、それぞれに治療法が異なります。今日は代表的な腫瘍を5つ紹介します。

司会者：1つめはどのような腫瘍でしょうか？

伊 藤：脳の周囲の膜の腫瘍、髄膜腫です。小さいものは治療をする必要がありません。大きくなって症状が出る場合のみ治療を行います。手術で腫瘍を残さず取りきることで完治が期待できます。抗がん剤は効きません。手術とカテーテル治療を組み合わせる治療もあります。まれですが悪性の場合、放射線治療を追加します。

司会者：2つめはどのような腫瘍でしょうか？

伊 藤：ホルモンの司令塔である下垂体にできる下垂体腫瘍です。近くに視神経があるので目が見えづらくなります。ホルモンのバランスが崩れていることがあるので、内分泌内科とチームを組んで治療を行います。鼻の穴から内視鏡で摘出する低侵襲手術が最近の主流です。

司会者：3つめはどのような腫瘍でしょうか？

伊 藤：神経膠腫という脳の中にできる腫瘍です。小児から高齢者まで幅広い年代で発症します。小児の場合は小児科医とチームを組んで治療にあたります。脳の中にできるので腫瘍と一緒に脳の一部切除します。どの部分を切除するかは、手術室でのMRIや脳波、覚醒下の手術で脳の働きを見ながら、慎重に決定します。手術ですべての腫瘍を取りきることはできないので、術後に化学療法と放射線治療を行います。

司会者：4つめはどのような腫瘍ですか？

伊 藤：悪性リンパ腫という、脳の中にできる血液の悪性腫瘍です。抗がん剤が良く効きます。診断するために腫瘍細胞を調べる必要があります。ナビゲーションシステムや術中MRIを使うことで、小さな腫瘍でも正確に細胞を取ることができます。抗がん剤治療は血液内科が担当します。

司会者：最後はどのような腫瘍ですか？

伊 藤：肺がんなど別の部分の癌が脳に転移した転移性脳腫瘍です。小さくて症状がない

ものは放射線治療が良いですが、大きくて症状があるものは手術の方が効果的です。元の癌の治療をしっかりと行うことが大切です。元の癌が見つからない場合、PETなどの特殊な検査で元の癌を探し、その癌に合った診療科で治療を行います。

司会者：本当に腫瘍によって治療が様々ですね。

伊藤：土浦協同病院は、今回ご紹介した診断や治療に必要な設備、治療に関わる診療科がすべてそろっておりますので、国内でも安心して脳腫瘍の診断・治療が受けられる病院の一つです。脳腫瘍の治療でご相談がある場合、脳腫瘍が心配なので脳ドックを受けてみたい場合、まずはお電話でお問い合わせください。

令和3年3月16日（火）、31日（水）放送

